

# 命令・祈願・感嘆表現の統語構造をめぐって\*

内堀朝子

日本大学

本論では、日本語における主文表現の中から、命令・祈願・感嘆表現を取上げ、それらの統語構造について、基本的な性質を検討する。これらの表現の統語構造には、(i)動詞の形態変化、(ii)モダリティを示す補文標識、(iii)モダリティを表わす語彙要素、が見られるが、本論では、これらの表現のうち、「こと」「ように」という共通する形態を文末に伴うものを主に議論する。特に(i)(ii)に関しては、動詞の取りうる形態変化上 imperative と、補文標識によって示される subjunctive の相違、また、(iii)に関しては、補文埋込み構造を有する構造について、考察する。具体的には、これらの表現と、主文現象としての丁寧表現との共起が許されるかどうか、また、これらにおいて、非主文現象および名詞性の指標としての「が・の」交替現象が起こるかどうかについて観察し、これらの表現の統語構造を探る手がかりとする。

## 1. はじめに

日本語の命令・祈願・感嘆を表わす表現には多様なものがあるが、以下(1b,c)~(3)にあげるように、文末に「こと」または「ように」を伴ってこれらの表現機能を果たすタイプのものがある。

- (1) a. (明日)(あなたが)(一人で) 来い/来なさい。  
b. (明日)(あなたが)(一人で) 来ること。  
c. (明日)(あなたが)(一人で) 来るように。

---

\* 本論の主要な部分は2006年2月の神田外語大学CLSワークショップ「日本語の主文現象と統語理論」で発表された。参加者との議論によって内容が深められたことを、ここに感謝したい。

- (2) 明日天気になるように。  
 (3) 王女様がなんとお美しいこと！

本論では、これらが、それぞれどのような統語環境に現われているか、検討していく。手がかりとなる現象として、これらの表現と丁寧表現「です・ます」との共起関係、また、これらにおける「が・の交替」現象を観察する。これにより、上の(1b,c)～(3)にあるようなタイプの命令・祈願・感嘆表現が、それぞれ以下(4b,c)の構造を成していることを示唆する。

- (4) a. 動詞の形態変化: **Infl** が重要な統語的機能を果たしている =(1a)  
 b. モダリティを示す補文標識: **C** が重要な統語的機能を果たしている =(1b,c), (2), (3)  
 c. モダリティを表わす語彙要素: 補文埋込み構造を有する =(3)

## 2. 丁寧表現および「が・の」交替の生じる環境

### 2.1 主文現象としての丁寧表現

ここでは、上にあげた種類の命令・祈願・感嘆表現の構造の違いを探る手がかりとなる現象として、丁寧表現の基本的な性質を観察する。丁寧表現「です・ます」は、(5)～(8)の例文 **b** にあるとおり主節には現われるが、(9c,d)にあるとおり補文内に現われることができない。<sup>1</sup>

- (5) a. 花子は明日本を ka-u。  
       b. 花子は明日本を kai-mas-u。  
 (6) a. 花子は昨日本を kat-ta。  
       b. 花子は昨日本を kai-masi-ta。  
 (7) a. その花は綺麗 da。  
       b. その花は綺麗 des-u。  
 (8) a. その花は綺麗 dat-ta。  
       b. その花は綺麗 desi-ta。

<sup>1</sup> 以下の例文では、形態変化が問題となる部分をローマ字表記とした。

- (9) a. 太郎は[花子が昨日本を kat-ta と] omot-ta  
 b. 太郎は[花子が昨日本を kat-ta と] omoi-masi-ta  
 c. \*太郎は[花子が昨日本を kai-masi-ta と] omot-ta/omoi-masi-ta  
 d. \*その本を太郎は[花子が昨日 kai-masi-ta と] omot-ta/omoi-masi-ta

補文に「ます」を伴った(9c)がそれ程悪く感じられないという話者も、補文内から目的語を主節文頭にかき混ぜ移動した(9d)は悪いと報告している。これは、丁寧表現「ます」が、「と」が導く節が直接引用であれば出現可能であるが、統語的に埋め込まれた補文になっている場合は出現不可能であることを示している。

ここで、以下(10)~(11)のように、埋め込み節内であっても丁寧表現が可能な例があることを指摘しておく。

- (10) [花子は昨日本を kai-masi-ta ので/ときが/けれども], 太郎は...  
 (11) [(もし)花子はその本を kai-masu-to/kai-masi-tara], 太郎は...

(10)~(11)の [ ] 内の節は(9c,d)と異なり、主節に対する付加節（原因、時、順接、逆接、条件などを表わす修飾節）であり、このような場合、丁寧表現が出現可能である。従って、丁寧表現は主節または主節に付加された節内に現われることができ、補文埋め込み構造には現われることができないことが分かる。<sup>2</sup>

## 2.2 非主文現象としての「が・の」交替

日本語における格の交替現象といわれるものの一つに、(12)~(13)に示すとおり、主節ではなく、ある一定の環境に埋め込まれた節の主語に対

<sup>2</sup> その理由については、今後の研究を要する。現時点で考えられるのは、丁寧表現の出現に、主文に典型的であるような何らかのモダリティ要素が関与している可能性である。これを示唆する事実として、本稿でも扱っているような「こと」や「ように」を伴う文が、補文として「期待する」「願う」「祈る」などの動詞に選択されている補文として用いられている場合（またはそこから派生された分裂文などの構造に現われている場合）においては、丁寧表現の共起が許されるのではないかと思われる例が存在する。このような事実が確かであるとすると、その場合は、丁寧表現を認可することのできるモダリティ要素が、特定の動詞や補文標識による選択に従って、補文内に存在していると考えられる。この点は、今後の検討課題としたい（その種の接続法補文の基本的性質については Uchibori 2000 を参照されたい）。

して、主格「が」と属格「の」が交替する現象がある。

(12) a. 私は[[太郎が/の 来た]理由]を知っている。

b. 太郎は[雨が/の やむ(時)まで]オフィスにいた。

(13) 太郎が/\*の来た。

このような「が・の」交替現象については、これまでに多くの先行研究による分析があり、特に、どのような環境のもとでこれが許されるかについては、議論が分かれている。大きく分ければ、「が・の」交替が起こる節の外部に、名詞（および限定詞）が存在しているという説と、「が・の」交替は、そのような外部の名詞（および限定詞）の存在に依存していないという説の2つがある。ここでは詳細に立ち入らないが、Maki and Uchibori (2005)での観察に従い、「が・の」交替現象において、主語に対する属格「の」の認可には、その節（の近隣）にある程度以上の名詞性 (nominal feature) の存在が必要であると考えられる。<sup>3</sup> すなわち、本論では、「が・の」交替が起こり得る節は、主節ではなく埋め込み節であり、全体が一定の名詞性を有するものと仮定する。

### 3. 統語構造のタイプ：動詞形態変化・補文標識・語彙要素

#### 3.1 命令・祈願表現における動詞の形態変化と補文標識

日本語命令表現のうち、典型的な命令文は、(14)に示すように動詞の形態変化によるものであるが、それ以外にも、Watanabe (1996)が論じたような「こと」を文末に伴う文（以下(15)に示す）や、Uchibori (2000)が論じたような「ように」を伴う文（以下(16)に示す）がある。

(14) (明日)(あなた/学生が)(一人で) ko-i/ki-nasai。

(15) Watanabe (1996)

(明日)(あなた/学生が)(一人で) ku-ru こと。

(16) Uchibori (2000)

(明日)(あなた/学生が)(一人で) ku-ru ように。

ここで、(15)(16)のタイプの命令表現は、(14)の動詞の形態変化による命令文と同様に主節を成しているのか、あるいは、(15)(16)の表現を補文として選択する主節動詞が省略（あるいは何らかの手段により音声形式を持たなくなる）によって生成されているのか、という問題を取上げる。2.1 節で触れた丁寧表現を手がかりにすれば、これと共起すれば主節、許されなければ埋め込み節ではないかと考えられる。以下、(15)(16)にそれぞれ丁寧表現「ます」を共起させた(17a, b)を考えよう。

(17) a. \*(明日)(あなたが)(一人で) ki-mas-u こと。

b. ?(?) (明日)(あなたが)(一人で) ki-mas-u ように。<sup>4</sup>

一見、これらの例から、「こと」「ように」による命令表現は丁寧表現と共起が難しく、主節を成していないのではないかとも思われる。しかし、ここで注意しなければならないのは、命令表現・丁寧表現それぞれの有する、speaker から addressee に対する態度およびその一貫性である。この点を考慮して、まず動詞に尊敬表現「お…になる」を加え（以下(18a,b)）、さらに丁寧表現「ます」と共起させたものが以下(19a,b)である。

(18) a. お薬を毎食後 o-nomi-nina-ru こと。

b. お薬を毎食後 o-nomi-nina-ru ように。

(19) a. お薬を毎食後 o-nomi-ninari-mas-u こと。

b. お薬を毎食後 o-nomi-ninari-mas-u ように。

(19)が問題ない事実からすると、適切な speaker/addressee 関係を考慮した文において、この種の命令表現は丁寧表現と共起し、従って、主節を成すものと考えることができる。

さらに、この点は以下の事実によっても支持される。すなわち、(20a,b)に示すとおり、これらを補文内に埋め込んだ場合、丁寧表現との共起は、予測どおり許されない。

---

<sup>3</sup> この考えでは、範疇としての名詞や限定詞の存在を必ずしも意味しない。

<sup>4</sup> この場合、祈願表現としてではなく、命令表現の解釈において不自然さがある。

(20) a. 太郎は[先生がお薬を毎食後 o-nomi-nina-ru こと]を求めた。

b.\*太郎は[先生がお薬を毎食後 o-nomi-ninari-mas-u こと]を求めた。

また、以下(21a,b)に示すとおり、これらの命令表現の内部では「が・の」交替が許されない。従って、動詞に続く「こと」「ように(または「よう」)」の範疇は、いわゆる形式名詞あるいは「が・の」交替に十分な名詞性を有するものと考えすることはできず、同時に、「こと」「ように(または「よう」)」が続く節自体も、そのような名詞(的要素)の埋め込み節になっていると考えることもできない。

(21) a. あなたが/\*の(一人で)ku-ru こと。→ koto ≠ formal noun

b.あなたが/\*の(一人で)ku-ru ように。→ yoo ≠ formal noun

この事実は、一般に名詞そのものが命令表現を構成することはないということからも自然に肯ける。<sup>5</sup>

次に、「こと」「ように」の範疇について触れると、「こと」は Watanabe(1996)の分析、「ように」は Uchibori(2000)の分析に従って、接続法を示す補文標識(subjunctive complementizer) であると考えられる。ここでは後者について、Uchibori (2000: Ch2)の補文標識の省略可能性に関する議論の一部を、ごく簡単に紹介する。

「ように」が、「命じる」「求める」などの動詞が選択する補文に生じる場合、「よう」「ように」「ようにと」という3種類の形態を任意に許すことがある。つまり、「と」という形態が任意に省略可能なものとして現われている。ここで、「言う」「思う」などの動詞が選択する補文に現われる補文標識「と」は、省略が許されないことが思い出される(関西方言を除く)。このことは、少なくとも日本語で「と」を代替

---

<sup>5</sup> これに対し、「禁煙」といった表現で、「煙草を吸うな」というような命令表現を構成する事実が、一見したところ反例となるかもしれない。しかし、例えば「煙草」や「喫煙」といった名詞は、当然のことながら、「煙草を吸え」というような命令表現に解釈されることはない。さらに、「喫煙」でなく「要喫煙」とすれば、喫煙しなければならないとの命令表現になることから、「禁煙」の例は、「禁ず」という動詞が「禁」として表示されているといった漢文および漢文における省略の特殊性を考慮する必要がある。

する空の補文標識が存在しないことを意味する。次に、以下(23a,b)に示すように、これらの補文を前置しても、「と」の省略可能性は変わらない。つまり、(22b)のタイプの補文に限り「と」単独の省略が許される。

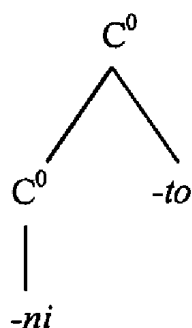
(22) a. [太郎が近く来る\*(と)]<sub>j</sub> 花子が 両親に t<sub>j</sub> 言った。

b. [e<sub>i</sub> 近く来る-yoo(ni(to))/\*(-yoo(ni(to)))]<sub>j</sub> 先生が 太郎<sub>i</sub>に 命じた。

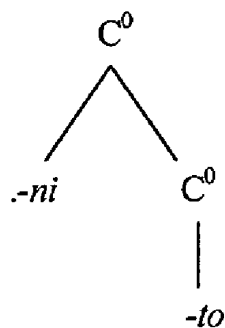
また、(22b)では「ようにと」全体の省略は許されていない。従って、(22b)の補文は、「と」が形態上現われていない場合、つまり「よう」あるいは「ように」の場合も、全体で補文標識によって導かれる節範疇（つまり CP）を成していることを意味する。

以上から、「よう（に（と））」という形態は、「よう」「に」「と」の3つの要素が、何らかの構造において結びついて出来た補文標識であろうと考えられる。まず「に」と「と」の関係については、どちらの要素が主要部となるかに応じて、可能性としては以下の3種類の構造がある。

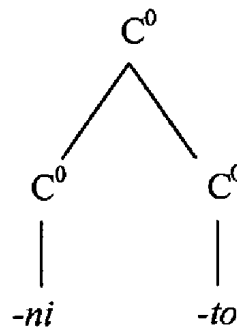
(23) a. *-ni* as a head



b. *-to* as a head



c. coordination of *-ni* and *-to*



まず、(22b)などの「と」が省略できる事実により、「よう（に（と））」に含まれる「と」が補文標識の主要部を成す（上の構造(23b)）という可能性は排除される。主要部を省略して、他の部分を残すような省略は考えにくいためである。次に、これらの要素の組み合わせのうち、\*「ようと」は許されない事実から、「に」と「と」が等位構造で結びついている（上の構造(23c)）という可能性も排除される。等位構造の一方である「と」の省略が許されるのに、他方の「に」だけが許されないというよ

うなことは考えにくいためである。一方、(23a)の「に」が主要部となつて「と」が付加している構造には、「よう」「ように」「ようにと」の3種類の形態の任意性の説明が成り立つ。すなわち、付加部の「と」を単独で省略するか、主要部と付加部全体の「にと」を省略するか、どちらの場合でも可能である。また、付加部「と」だけを残して主要部「に」を省略することは不可能である。

最後に、「よう」が補文標識の一部であることを、「が・の」交替現象に基づき確認する。以下(24)が示すとおり、「ように」が主文の命令・祈願表現として用いられる場合、<sup>6</sup>「が・の」交替は許されない。つまり、「よう」が形式名詞であり、別個に埋め込み節を取っていると考えることはできない。

- (24) a 明日 あなたが/\*の 一人で来るように。  
b. 明日 雨が/\*の 降るように。

このことは、丁寧表現との共起関係からも、再度裏付けられる。すなわち、以下(25)が示すとおり、「ように」が導く祈願表現では、丁寧表現「ます」と共起することができることから、全体は主節を成していると思なせる。

- (25) a. 明日一人で o-ideni-nar-imas-u ように。  
b. 明日雨が furi-mas-u ように

節内の要素として、モーダル要素といったものを、補文標識と時制の他に何も仮定しないことにすれば、「よう」も祈願文を構成する補文標識の一部を成していると考えられ、さらに省略可能性の事実から、上の(23a)の構造の「にと」が「よう」に付加していると考えることができる。すなわち、「よう」が全体の主要部であるとすれば、「よう」のみを省略して「にと」あるいは「に」を残すような省略は考えられず、事実と

---

<sup>6</sup> 主文の祈願表現の場合、「と」が現われることはできない(例：\*「明日雨が降るようにと。」)。これにより、「と」は、文のモダリティの標示に関わらず、埋め込み構造であることを標示する機能を担う補文標識であると言える。



合致する。以上から、ここでは「よう（に（と））」は、命令・祈願の解釈につながるモダリティを標示する補文標識であると考えられる。

### 3.2 感嘆表現における語彙要素の補文埋め込み構造

ここでは、以下(26)にあるような「こと」を伴う感嘆表現について検討する。<sup>7</sup>

(26) a. 王女様が なんと o-utukusi-i/o-utukusikat-ta こと！

b. 王女様が なんと上手に歌を o-utaininar-u/o-utaininat-ta こと！

まず、これらに丁寧表現が共起できるかどうか確認する。

(27) a. 王女様が なんと o-kirei-des-u こと！

b. 王女様が なんと o-kirei-desi-ta こと！

(28) a. 王女様が なんと 上手に歌を o-utai-ninari-mas-u こと！

b. 王女様が なんと 上手に歌を o-utai-ninari-masi-ta こと！

このように基本的に丁寧表現と共起可能だと思われる。この事実が確かだとすると、3.1 節で議論した命令・祈願表現と同様に、感嘆表現でも「こと」で終わる主節が成立していると考えられる。<sup>8,9</sup>

しかし、一方ここで「が・の」交替現象を見てみると、以下(29)のよう

---

<sup>7</sup> 「こと」を伴わず、述語の非過去形で終わる文が感嘆表現として使われる場合（以下(ia,b)）がある。一見、「こと」を省略しているだけのように見えるが、(26)(27)の述語が過去形の場合対(ib)という対比に示されるとおり、「こと」を伴う場合は述語が過去形でも許されるのに対し、「こと」を伴わないで述語の過去形のみで感嘆表現として用いることはできない。ここではこれ以上扱わないが、「こと」の省略とは異なる場合があることに注意すべきであろう（脚注9も参照）。

(i) a. 王女様がなんと o-utukusi-i！ / b. ??王女様がなんと o-utukusikat-ta！

<sup>8</sup> これらの例文における「～ですこと」「～ますこと」といった表現は、いわゆる女性言葉であり、女性しか用いない表現（他に例えば、上昇イントネーションを伴った「～ですわ」「～ますわ」など）であると見なす話者もいるかもしれないが、実際そうであったとしても、動詞の補文内には、「です」「ます」を伴ったそれらの表現が（直接引用以外では）生じ得ないという事実は変わらず、従って補文構造を成していないという点も変わらない。

<sup>9</sup> 「です・ます」が「こと」に続く位置に生じることは可能である（例：「王女様がなんと お美しい/お美しかった こと です/でした」）。これは、本論の例(30)以下で論じる場合の構文から派生できる。また、脚注13も参照のこと。

に、それが許されるという事実気づく。

(29) 王女様が/の なんと go-rippana こと！<sup>10</sup>

→ koto = formal noun/ nominal feature?

これは、「こと」が命令表現に用いられている場合とは、対照的であり ((21a)を参照)、感嘆表現に用いられている場合の「こと」は、少なくとも「の」を認可する程度の名詞性を有すると言える。<sup>11</sup> ここで、上で見た丁寧表現との共起現象と矛盾のない説明を試みるとすれば、感嘆表現に用いられている「こと」は、関連するモダリティを担う補文標識であり、単独で主節を導くことができるが、命令表現の「こと」の場合とは異なり、名詞性を有する(つまり[+N]あるいは[+D]を持つ)ものであるという可能性がある。<sup>12</sup> そして、このような名詞性を有する「こと」は、コンピュータの *da* (プラス話者の推測や主張といったモダリティを表わす助動詞 *-roo* (あるいはその丁寧表現)) によって導びかれる可能性があり、その場合は、次のような感嘆表現となる。<sup>13</sup>

(30) a. 王女様が/の なんと お美しいこと だ/だろう！

b. 王女様が/の なんと お美しいこと です/でしょう！

---

<sup>10</sup> 脚注7で触れたように、述語の非過去形のみで感嘆表現となる場合があるが、この(29)でも「こと」を伴わず感嘆表現となり得る。ただしこの場合は脚注7の場合と異なり、「こと」の省略が疑われる。なぜならここでは、述語の非過去形の形態が、「立派な」となっているからである。一方ここで、(29)の述語が通常文の非過去・終止形である「立派だ」となった場合も、それだけで感嘆表現として用いることができるが、これは脚注7と同様の場合だと考えられる。「王女様が/のなんとご立派な！」がどのように派生されるかについては、今後の研究が必要である。

<sup>11</sup> 補文標識の名詞性に関して、以下の事実が関連すると思われるが、詳細な分析は今後に委ねたい。ここで見ている「こと」で終わる感嘆表現は、日本語の *wh* 疑問詞を構成する主要要素である *indefinite pronoun* 「なに」から派生されたと思われる「なんと」を伴う。さらに「こと」自体も、「なんと」に呼応して、疑問の *particle*/補文標識と同形の「か」を文末に任意に伴って、「ことか」という形態に交替可能である。また、この形態は、「のか」とすることも可能であり、かつ、以下本論で見ると、「の」単独では感嘆表現を構成しない事実もある。これらの事実には、感嘆表現を導く補文標識のモダリティに関する素性および名詞性が関与していると考えられる。

<sup>12</sup> このようなCの存在は Maki and Uchibori (2005)も別個に提案している。

<sup>13</sup> 「だ(ろう)」という主節述語は非過去・終止形であり、そのため文全体が感嘆表現として用いられているとここでは考える。脚注7参照のこと。

このような場合も当然「が・の」交替が許される。ここでは、「こと」が導く節は、「だ/だろう」あるいはその丁寧表現としての「です/でしょう」によって埋め込まれていると見なせる。<sup>14</sup>

「こと」を伴う感嘆表現において、このような埋め込み構造を考えることにより、「のだろう・のでしょう」を伴う感嘆表現（以下(31)）との共通点・相違点を捉えることができる。

- (31) a. 王女様がなんとお美しいのだ/だろう！  
b. 王女様がなんとお美しいのです/でしょう！

まず、このような「のだろう・のでしょう」は、「ことだろう・ことでしょう」と同じように、いわゆる形式名詞の一種である「の」を含む節を含むと考えてよいか。事実を見ると、「の」は「こと」と違って、単独で感嘆表現を作ることはない（以下(32)）、「こと」同様な構造で、「だ/だろう」「です/でしょう」に伴われていると考えることは難しい。

- (32) \*王女様がなんとお美しいの！<sup>15</sup>

---

<sup>14</sup> 本論の主要部分を発表した神田外語大学 CLS ワークショップ(2006)参加者から、「こと」を伴う主文の感嘆表現が、「～に驚いた」「～に感動した」といった述語の選択する埋め込み節（おそらく factive complements）であり、述語の省略により派生したものと考える可能性はないかという質問があった。その可能性は、以下の事実によって排除されると考える。

(i) 太郎は[王女様が/の（\*なんと）お美しいこと(\*か)に]驚いた

(ii) 太郎は[王女様が/の（なんと）お美しいこと(か)と]驚いた

これらの例文が示すとおり、この種の主節動詞が、直接引用として「なんと(～か)」を含む[ ]内のような感嘆文を取ることはできても、補文として感嘆文を取ることはできない。従って、「なんと」と「こと」を同時に含むような感嘆表現が、この種の述語の補文から、述語を省略して派生したものと考えることもできない。例文は省略するが、「です」との共起をテストしても、同様の結果となる。

<sup>15</sup> 話者によってこの例文が良く聞こえるとすれば、脚注7で触れたような、述語の非過去・終止形で終わる文が感嘆表現として用いられ、かつ、文末にいわゆる女性言葉の「の」が伴っている場合と受け取られている可能性がある。その場合、ここで考えている構造とは異なる。また、良く聞こえる場合でも、以下(i)のように、丁寧表現と共起させた感嘆表現として解釈することは難しい（この場合も、「の」による感嘆表現ではなく、下降イントネーションを伴った「～ですの」「～ますの」という女性言葉として取れば、幾分許容度が上がる）。

(i) \*王女様がなんとお美しいですの！

さらに、このような場合の「の」が、「こと」の場合とは異なり、名詞名詞性をもった単独の要素（例えばいわゆる nominalizer など）である可能性は、以下のとおり「が・の」交替が許されないことから排除される。<sup>16</sup>

(33) a. 王女様が/\*の なんとお美しいのだ/だろう！

b. 王女様が/\*の なんとお美しいのです/でしょう！

(34) \*王女様が/の なんとお美しいの！

これらの事実からは、このような感嘆表現における「の」は、単独で埋め込み節を導いているのではなく、「のだ」というモダリティを表わす述語の一部にすぎないという分析が支持される。これらの感嘆表現と、「こと」を伴う感嘆表現は、表面的には非常に似ているが、以上のような差異に注意すべきであろう。また、これらの感嘆表現に見られる構造を参考に、これら以外のモダリティを担った表現のうち、例えば、「…べきだ」「…はずだ」等の統語構造について、埋め込み構造を成しているかどうかを明らかに出来る可能性が期待できる。

#### 4. おわりに

本論では日本語の命令・祈願・感嘆表現のうち、動詞の形態変化以外によるもの、特に「こと」「ように」を伴うものを取上げてその統語構造を考察した。命令・祈願表現の「こと」「ように」は、モダリティを標示する補文標識が重要な機能を果たし、かつ全体として主節を構成していると考えられ、また、感嘆表現の「こと」は、補文標識の存在と同時に何らかの埋め込み構造を含むものと考えられる場合があった。それぞれについては、主文現象としての丁寧表現、非主文現象としての「が・の」交替現象、さらに名詞性の指標としての交替現象などとの共起関係を、構造を探る手がかりとした。これにより、一見、形態的に共通なも

---

<sup>16</sup> ここでの「が・の交替」が難しい事実は、Maki and Uchibori (2006)によって報告されている。また、金水敏氏、吉村紀子氏をはじめとする神田外語大学 CLS ワークショップ(2006)の参加者から指摘された。

のであっても、範疇や素性に相違が見られることが分かった。

以上の考察から、日本語の命令・祈願・感嘆表現は非常に多様性に富んでおり、それぞれについて、どのような統語構造のもとに現われているのかを、経験的な証拠に基づいて検討することは、主節における基本的な節の構造—特にモダリティを標示するCや、関連するTなどの範疇が投射する構造—を考える上で、非常に重要であることが示唆される。

## 参考文献

- Maki, Hideki. and Uchibori, Asako. 2005. "Ga/No Conversion." a paper read at the LSA Summer Institute Workshop on Linguistic Theory and the Japanese Language.
- Watanabe, Akira. 1996. "Nominative-genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.
- Uchibori, Asako. 2000. *The Syntax of Subjunctive Complement: Evidence from Japanese*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

275-0005

千葉県習志野市新栄 2-11-1

日本大学生産工学部

教養・基礎科学系

[uchibori@cit.niohn-u.ac.jp](mailto:uchibori@cit.niohn-u.ac.jp)